第16回

小さな助け合いの物語賞

「私も見つけた、小さな助け合い。」
あなたの体験をストーリーにしてみませんか。

どなたでも応募できます
エッセー 作文 募集

応募期間 2025年6月1日(日)～9月5日(金) ※9月5日(金)必着

上位入賞作品
あなたの作品がパラパラ漫画になります!
中面で過去動画を紹介しています。

学校からの団体応募には、
参加賞をプレゼント

協賛：全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金
後援：金融庁・文部科学省・金融経済教育推進機構

Shinkumi Bank 信用組合 しんくみ
ちかくにいるから、チカラになれる。

“しんくみバンク”信用組合は「助け合い」から生まれた金融機関。
この懸賞作文を通じて「助け合い」の心が広まることを願っています。

第16回「小さな助け合いの物語賞」エッセー・作文募集

テーマ	実体験をもとにした「小さな助け合い」 ●誰かに助けてもらったときの感謝の気持ち ●助けたことで得られた豊かな心 (家族や知人、同僚など身近な関係での助け合いは対象外となります)
文字数	800～1200文字
応募期間	2025年6月1日(日)～9月5日(金) ※9月5日(金)必着
応募方法	●WEB応募フォーム:応募特設サイトより応募ください。 ●郵送・メール:専用の応募用紙を作品と併せて応募ください。 ※応募要項・応募用紙・WEB応募フォームは応募特設サイトに掲載しています。 一般社団法人 全国信用組合中央協会 応募特設サイトはこちら
応募先	郵送:〒105-7208 東京都港区東新橋1-7-1 汐留メディアタワー 8F「小さな助け合いの物語賞」応募事務局 メール:tasukeai@shinyokumiai.or.jp メールタイトルは「助け合い応募」としてください。 郵送・メールによる応募の際は、必ず応募用紙を添付してください。
賞の種類	作品賞 しんくみ大賞:最優秀賞 1編／賞状・副賞(商品券20万円分) 作品賞 しんくみきずな賞:優秀賞 1編／賞状・副賞(商品券10万円分) 作品賞 未来応援賞※:青少年を対象に、今後の人生のプラスとなるような出会いや助け合いを描いた作品 2編／賞状・副賞(図書カード5万円分) ※未来応援賞は、18歳以下(2026年3月31日時点)に贈られる賞です。 作品賞 ハートウォーミング賞:助け合いから生じる人に対する思いやり、やさしさが感じられる作品 最大15編／賞状・副賞(商品券1万円分) 学校賞 徳育奨励賞※:応募数の最も多かった学校 1校／賞状 ※徳育奨励賞は多くの学校に受賞機会を設けるため、受賞は 1 回限りです。
選考・発表	審査結果は10月中に主催社ホームページにて入賞者の作品・氏名を発表します。上位入賞者は10月17日(金)に東京で行われる全国信用組合大会で表彰します。(徳育奨励賞も含む)
注意事項	応募要項の注意事項をご確認のうえ、応募ください。
主催	一般社団法人　全国信用組合中央協会
協賛	全国信用協同組合連合会・全国信用組合企業年金基金
後援	金融庁・文部科学省・金融経済教育推進機構

信用組合使用欄

物語をあなたにお届けします。

昨年の受賞作品2編をご紹介します。
誰かが誰かを助けた小さな「物語」が、
あなたの心を温めてくれたなら、
次はあなたの「物語」を届けてください。

上位入賞作品

あなたの「物語」がパラパラ漫画になります！

しんくみバンク公式YouTubeチャンネルで公開！

しんくみ大賞
声かけはエール

しんくみきずな賞
白杖の女性と大阪のおばちゃんと

パラパラ漫画の動画再生リストはこちら

しんくみ大賞

声かけはエール

原口　眞帆

「こんにちは。」
「調子はどう？」
病院の地下、薄暗くてはじめは何だか怖いなって思っていた場所も、毎日同じ時間、同じ顔触れだから、いつの日か楽しみな場所になった。楽しみ、という表現は適切ではないかもしれないけれど、病室から出られない日々を思えば、この放射線治療病棟は唯一、私が小児病棟から出られる「お出かけ」の時間だった。

私は、小学五年生の時に脳腫瘍が見つかり手術・治療の為、約九か月入院をした。これはその入院中に出会った、名前も知らないおじさんとおばさんとの話だ。

放射線治療は、一度にたくさんの量を照射することが出来ない。毎日少しずつ照射する。そのため毎日、決められた時間に治療室に向かう。待合室には、いつものメンバーだ。

私が治療を受けていた二〇二一年は、未知のウイルスが猛威を振るっていた、コロナ禍まっただ中だった。ソーシャルディスタンス、懐かしくも思えるこの言葉。私たち患者は免疫が落ちていたため、人との接触に人一倍気をつかい、人と距離を置かなければならない、家族にも会えない入院生活だった。

そんな中、私の「お出かけ」放射線治療。私の治療時間は、他の子供は一人もいなくて、そこで会う患者は全員大人だった。毎日顔を合わせれば、あいさつをするようになるし、声をかけ合うようにもなる。

「おじょうちゃんが頑張っているから、おじさんも頑張るよ。」

「あと何回治療はあるの？　一緒に頑張ろうね。」
「お互いあと少しですね！　頑張りましょう。」
このやり取りで、どれだけ私の気持ちが軽くなったか。お互いエールを送ることで助け合っていた。孤独になりがちな入院生活だったけれど、コミュニケーションを取ることは、年代を超えて出来るのだ。コロナ禍で、人との関わりが希薄になりがちな日々だったからこそ感じた、人との関わりの温かさ。

助け合いって難しいことではなくて、声かけ一つで出来てしまうと思う。あの時のあいさつ、互いに送ったエールを今でもたまに思い出す。

おじさん、おばさん、私、治療を終えて、退院したよ。中学生になったよ。あの時、笑顔で声をかけてくれて勇気がわいたよ。

いつかまた会えたら、伝えたい言葉がたくさんある。話したいことがたくさんある。想いを寄せる人がいることは幸せなことだ。

私の笑顔、あいさつや声かけが、誰かへのエールになると信じて。

「こんにちは。」
「どうしたの？」
声かけの出来る人でいたい。

しんくみきずな賞

白杖の女性と大阪のおばちゃんと

松木園　紗絵

電車で帰宅途中の出来事です。その日は出張からの直帰で、いつもより早い時刻の電車に乗っていました。夕方の早い時刻とはいえ、座席は満員で、混雑している車内。出張疲れの中、自宅の最寄である終点駅に向けて走る電車に揺られていました。

あと三駅で終点駅、というところで、白杖を持つ若い女性が乗ってきました。私は邪魔にならないように出張の荷物を脇へよけたり、体位をよじったりして私なりにその女性に配慮したつもりでした。ちょっとでも女性が快適に乗車できるように、と。その時、私の背後から年配の女性が声をかけました。「白杖のお姉ちゃん、吊革ここよ、ここしっかり持つんやで。」白杖の女性はびっくりしながらも、「ありがとうございます。」とはにかみながら会釈しました。年配の女性は続けます。「おばちゃん、おせっかいかもしれへんけど、ほっとかれへんわ。あと二駅で降りるけど、できることあったらなんでも言うんやで。」すると、白杖の女性が軽く嗚咽をもらして、こう答えたのです。「おせっかいなんかじゃありません。私、いつもこの電車に乗るんですが、こんなに優しい声掛けをしてもらったのは初めてです。私、全く目が見えていなくて、みなさん気を遣ってくれたりしてるんだと思うんですけど、直接その優しさを感じられて嬉しかったです。」と。

私は、自分なりの配慮が白杖の女性には伝わっていない、自己満足であることを恥じました。同時に、できることはないか聞く、という「大阪のおばちゃん」の行動力に「温かい」を通り越して「熱い」ものを感じ、疲れていた私も活力がみなぎりました。気づいたら、私は女性に声をかけていました。「終点駅まで乗るようでしたら、私が改札まで案内しますよ。」と。

白杖の女性は私の声に振り向くと、満面の笑みで「終点まで乗ります。いつも一人なんで、今日はお願いしようかな。」と言ってくれました。もしかしたら、本当におせっかいだったかもしれません。でも、声をかけなければ、私の気持ちも伝えられなかったかもしれません。私の「形に見える思いやり」に背中を押してくれたおばちゃんは、「あんたもええ子やな。ほな、頼んどくで。」と私に手を振り、一足先に下車しました。私は、女性と「顔を見合わせて」ふふっ、と笑いながら、おばちゃんに「ありがとうございました」と一礼しました。顔を見合わせているその女性に私の姿は見えていないかもしれませんが、たしかに、お互いの心は通じ合っていました。

改札までの短い時間、私たちはたわいのない話をしながら、一緒に歩きました。改札で別れる時、女性に言われたこの言葉、そして笑顔が今でも疲れを飛ばしてくれるくらい私の胸を熱くさせてくれます。「今日が今までで一番楽しい通勤時間になりました。ありがとう。」

二人の女性からたくさんのことを教わった、私の大切な思い出です。

他入賞作品はこちらをご覧ください